

2012

1

目次  
CONTENTS

2 新春のごあいさつ

4 水鳥

7 国旗・国歌・国民の祝日について  
ご存じですか

8 公民館まつり2011

9 那珂市消費生活センターです

10 まちの話題

13 Information ほか

14 さわやかさん、表紙の裏側 ほか



みんなで作ったおもちはおいしいね！（額田幼稚園：防火餅つき会）

# 水鳥

15

郷土ゆかりの画人たち

歴史民俗資料館では、昨秋の特別企画展で郷土ゆかりの日本画の画家たち5人を紹介しました。その中でも、今年の干支である「辰・龍」が描かれた大作2点が来館者の目を引きました。1点は佐川華谷の屏風絵「富嶽神龍之図」、もう一つは武藤光蓬の襖絵「雲龍」です。佐川・武藤両氏とも本米崎の出身です。今回は、さらに数人を加え、改めて郷土ゆかりの画人たちを紹介していきます。

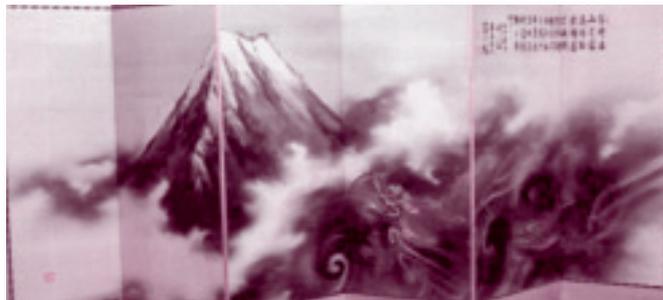
## 1 佐川華谷

佐川華谷（さがわ・かく）は慶応3年（1867）生まれ、旧水戸藩士松平雪江に師事した。その後辰ノ口（常陸大宮市）の野沢白華の門人となり、茨城県警巡査として奉職しつつ絵の制作に励んだ。明治37年（1904）、師の白華が死去した後上京して小室翠雲に師事し、荒木十畝とも交流した。大正9年（1920）の第2回帝国美術展覧会に初出展し、入選作品が宮内省御用品となった。その後も帝展や茨城美術展出品（無鑑査）と創作活動に励み、晩年には茨城県に「富嶽図」を寄贈している。昭和21年（1946）、東京にて79歳で歿した。

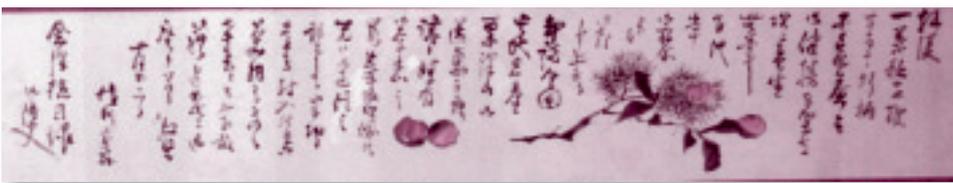
華谷の「富嶽神龍之図」（個人蔵）は、昭和5年（1930）、華谷が63歳の時に描いた6曲1隻の屏風図である。華谷は、この画賛の中で「富士山は最高の霊峰であり、龍もまた

鱗蟲（鱗のある虫類）の長たるものである。その龍が、さらに最高峰の富士を越えようとしている。ここには、旺盛な向上心を見ることができ、この姿は、修養精神の資とするに十分である」と訴え、見るものを励ましている。

正月など祝いものとしては「丹鳳朝陽」がある。彩色豊かで華谷の絵のイメージを一新させるものでもある。また、知人宛の手紙は栗を贈られたことへの礼状であるが、栗を描いて絵手紙としていところは貴重なものである。



◆右：「富嶽神龍之図」(個人蔵)、左：「丹鳳朝陽」(個人蔵)



◆佐川華谷が知人に宛てた手紙(一乗院寄贈、当館所蔵)

## 2 武藤光蓬

武藤光蓬（むとう・こうほう）は明治32年（1899）生まれ、本名を質三といった。太田中学校を卒業後上京して永田春水の内弟子となる。近衛歩兵隊を除隊後、同郷の先輩画人佐川華谷の勧めで荒木十畝に師事して研鑽を積んだ。大正12年（1923）、第1回茨城美術展に出展して初入選を果たし、その後も茨展に積極的に出展した。これからの活躍が期待される昭和16年（1941）、病を得て43歳の若さで東京にて歿した。

光蓬の襖絵「雲龍」は、「質三」の署名であることからまだ雅号を得ない初期のころの作品と考える。上方を泳ぐ吽形の龍と下から昇ろうとする阿形の2匹とが競い合っつて雲を涌かせ風を起こす姿は、勇ましく勢いがあり迫力に満ちた作品である。大震災に見舞われた東日本人々に大きな勇気を与えるものでもある。正月にふさわしい作品に、「雪」・「梅」・「ボタン」に小鳥・「松に鷹」が描かれた彩色画がある。伝統画に近代画法を取り入れた作風に変化する素地が見られる。



◆「雲龍」(鱗勝院蔵)



「松に鷹」(個人蔵)

## 3 額田照通

額田照通（ぬかだ・てるみち）は最後の額田城主で、落城後は奥州の伊達政宗を頼り、その後越後の松平忠輝に仕えた。忠輝が国替えとなった後は浪人となっていたが、元和3年（1617）、江戸に於いて額田久兵衛照通として水戸藩初代藩主の徳川頼房に仕えた。600石を得て御側同心頭・先手足軽頭となり、頼房の京都上洛にも供奉している。照通は「鳴き鶉」の画人として知られているが、「止り木の鷹」も伝えられている。室町時代に流行した水墨画に共通する花鳥画であるが、一般的な「松に鷹」の構図と異なり、「止り木の鷹」は丹精・細密に描かれている。頼房から鶉鷹の免許を得た照通が頼房の鷹を描いたとされ、照通の武人としての人柄がしのばれる。



「止り木の鷹」(個人蔵)

## 4 鈴木樫堂

鈴木樫堂（すずき・れきどう）は寛政12年（1800）に額田南郷の庄屋を歴任する鈴木家に生まれた。市十郎を襲名し、諱を世美、梅岡と号し、雅号は樫堂と称した。庄屋役を務めるとともに黒羽藩絵師で「鮎図」で知られる小泉斐に就いて絵を学び、花鳥画・人物画を好んだとされる。同じ門人として水戸藩士立原杏所がいる。弘化元年（1844）、45歳で歿した。唐に渡って仏教を会得したとされる菅原道真を描いた「渡唐天神図」や地元額田の私塾教師原好誼軒の肖像も描いている。



原好誼軒の肖像(個人蔵)

## 5 檜山淡齋

檜山淡齋（ひやま・たんさい）は戸村の檜山仁兵衛の二男で諱は義慎、通称は貞吉。狩野派を習得し江戸に出て産を起こし商いを業とした。書画の鑑定家としても名高く古文書を好んだ。幕府に仕え天下の古文書をすべて写すことを幕府に願い出たともいう。水戸藩の学者立原翠軒とも親交があった。天保13年（1842）、江戸にて歿した。自画像がある。



檜山淡齋自画像(個人蔵)

## 6 海野陽光

海野陽光（うみの・ようこう）は明治14年（1881）五台村に生まれ、本名は留吉、梅城とも号した。22歳で上京し、池上秀畝の門人となった。四条派を研究して花鳥画を好んだが、動物画に秀でており、「狸図」を多く残している。東京の画壇で活躍し、狸図・十二支図などが宮内省御用品となっている。昭和18年（1943）、郷里の五台村に疎開し、茶の湯や華道をたしなむ一方、絵の指導も行った。終戦後は東京へ戻り昭和31年（1956）、75歳で歿した。陽光の「松林と鶴」は松の樹皮や鶴の羽根などが細密に描かれている。狸の後ろ姿の構図や細密・朦朧の配分が見事である。



右：「狸図」(個人蔵)、左：「松林と鶴」(個人蔵)

## 7 石川大輔

石川大輔（いしかわ・だいすけ）は明治38年（1905）菅谷村に生まれた。太田中学校を卒業後、東京美術学校日本画科に入学、日本画に西洋画の写実的要素を組み入れた結城素明に学び、大輔の作品にもその影響が色濃く表現されている。東京美術学校在学中に第4回茨城美術展に出展し、初入選を果たしている。戦時中、郷里の菅谷に疎開し、地元の家志望の若者の育成に当たった。昭和47年（1972）、菅谷にて67歳で歿した。新春にふさわしい「梅に鶯」、祝い事には「恵比寿・大黒」の絵がある。



右：「梅に鶯」(個人蔵)、左：「恵比寿・大黒」(個人蔵)

### — 那珂のひなまつり 雛人形展を開催します —

◆期 間 2月4日(土)～3月11日(日)

江戸時代後期から現代までの様々なお雛様が時代を越え一堂に会します。雛のつるし飾りも会場を彩ります。

【展示解説会】

◆日 時 2月11日(土) 10:00～

◆場 所 歴史民俗資料館

◆参加費 無料

◆参加方法 当日会場へお集まりください。

申し込み・問い合わせ 歴史民俗資料館 ☎297-0080